



奇妙な動植物

虫を射て食ふ魚

在高崎 田寺寛二

前回到述べましたアン

コウはなかなか巧妙な

ことをやります、今

度はまだまだ奇妙不可

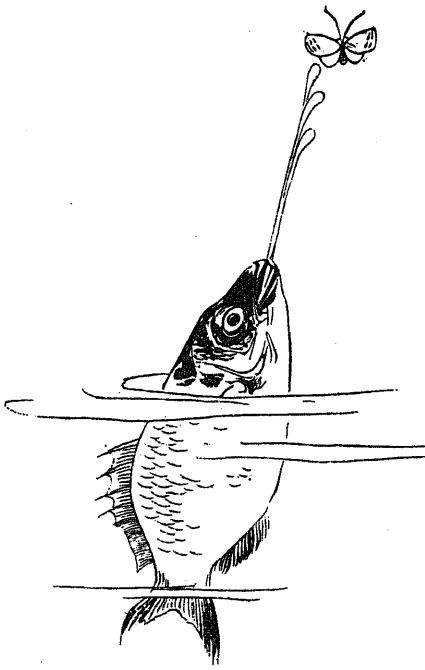
思議なことをする動物

を御照會しませう。

水盤の中に飼ふてゐる

金魚や鯛は少し時が経

ちますと、水の中にと



けてゐる空氣がなくなるものですから、こらゑき  
れなくなつて口を水面へ出して空氣を吸ひます。  
また池や沼の傍を通つてゐますときその水面に氣  
をつけてゐますと、鱒が時々下から上つてきまし  
て、空氣を一寸吸つて直ぐ下ることがあります。  
これなども一寸知らぬ人が見たら随分面白がるか

もしれませぬが、こ

ゝにまつとまつと面

ト小しろ

キさ白いことがあります

ソな

テをどういふことかと申

ス落

がさししますとトキンヲテ

かし、スといふ魚は圖にか

らして

水を出る居

て

し圖

魚ですが、この魚は

常に水面に近い處を

泳いでゐます。もし小さな虫類が水際を飛んで居ますと、トキソフテスは密つと頭を出しまして能くこの虫をねらひ自分の口から水を噴き出しまして、之を落して食ひます、その有様は丁度小さな水鐵砲を射る様です。

前にいひました、アンコウも此トキソフテスも一寸考へると、人より勝れた手並を持つてゐる様ですが、こんな上手にやるのは、吾々の様に決して考へてやるのではなく、たい魚や虫をみると自然にかうなるのです。

斯ういふと甚だ變な様ですが、此が人間と違つた處で、此作用を動物の本能作用と申します。

赤兒の生れ乍らにして乳を吸ふのも、蟻が夏の時に力一ぱい食物を其巢に集めるのも、燕が巧みに巢をかけるのも、蜘蛛が立派な網を張るのも、皆同

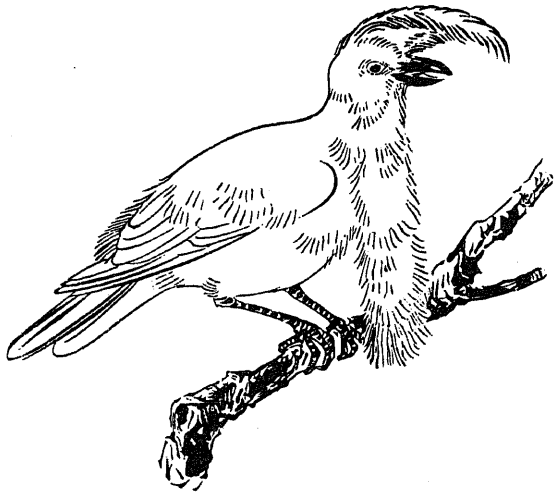
じことでそのもの自身には何も知らないで、唯無暗にやるのです。世の人は蟻を勤勉家で、中々遠くまで慮のあるものといつて、蜻蛉が夏の中だけ飛び廻つて、涼しくなりかゝると死ぬのにくらべて、善い誠にしますが、蟻は決して夏食物を集めて居いて、冬働けぬ時に食はうといふ様な、そんな賢いものではありませぬ、夏本能で畜へた食物が、遇々冬になつて役にたつた位な事です。まだこの本能作用については、随分面白いこともありますが、まあ此れ又にしておいて、ちと流變りの鳥でも御目にかけてませう。

### 傘を持つて居る鳥

カサドリは南亞米利加に棲んでゐる鳥の様な鳥ですが、頭の上には美しい黒がかった、青色の而も艶のある羽毛が、球の様になつて頭を被ふてゐま

す。この冠は常にはさ程大きなものではありませぬが、怒つた時などは、孔雀七面鳥が羽をひろげたときのように羽を逆立てます。そのときにはその冠の直径は四寸二分位にも大きくなります。此冠は何の爲めにあるかと申しますと、鶏の雄のトサカ牡獅子のタテガミ牡鹿の角に同じ様に皆雄の裝飾なのです。尙ほ此鳥は圖にある様に其頸の處から胸の方へ細長い袋が下がつてゐます。

此袋の部分に生へて居る羽毛は青色をしてゐまして、魚の鱗の様に覆瓦状



に疊みかゝつてゐます。此袋の効用は一方では一種の裝飾となり、また一方では蛙が聲を出すときに頬の邊で膨れます袋の様に聲を大きくする機關なのです或學者の研究によりますと、此袋の發達は氣管（咽喉から肺へ空氣が通入路）や、發聲器（聲の出る機械）などの生長と、一致して居るとの事です。

膨れますからです。斯様に美麗な冠美事な袋は

何故此袋が聲を大きくする作用があるかと申しますと此鳥が鳴くときには此袋が

雄<sup>おとこ</sup>にだけあつて雌<sup>めす</sup>には唯<sup>ただ</sup>其名<sup>そのな</sup>残<sup>のこ</sup>があるばかりで  
 す。何<sup>なに</sup>故<sup>せ</sup>でせうか。



Hated is as blind as love.  
 嫉妬の盲目なるは戀愛と同じ。

# 史傳



拜啓この度婦人と子とも申雜誌、御發行のよしにて、一部御寄贈下され、謝し奉り候、ついでには、右の材料にもがなと存候てこの程中、鹿洲全集より、譯しおき候賢婦傳を、御覽に入れ候併し漢文直譯ゆゑ、ぎくぐくとして讀み難かるべしと存候へ共もと鹿洲の文章ゆゑ、漢文流に自らの趣味あるものなことをくく意譯にするはこゝろよからぬまゝ、かくもものしたることに候。

次に、この賢婦傳は、わか明治の御婦人かたには、如何とも心附きたるふし／＼も候へども、その心を守ることのかたきとこる、夫を助くる心はえのころなど、いと目出度存候。たゞ所かはれば品かはる、と云ふたとへの如く、その心をつくすむき／＼の、うげかはれぬふしあるは、彼れとわれと、よろづ習はせの異ればなり。それさえ汲みわけたまは、この傳もまた必ず教へ草となるべしと存候ま、一應の御斷りを、添えたる事に候  
 願首

杉山文悟